

郭沫若作

須田禎一譯

屈 原

てすびす叢書

Thespis Series

未 來 社

屈 原

1952年7月25日 第1刷印刷

1952年10月20日 第2刷發行

定價 160.00

譯者との
了解で檢
印を廢す

譯 者 須 田 禎 一

編集者 細 川 隆 司

發行者 西 谷 能 雄
東京・駒込・追分町

印刷者 中 内 佐 光
東京・千代田・飯田町

發行所 東京都文京區駒込追分町 53

株式會社 未 來 社

電話小石川 641778
振 替・東 東 87385

落丁・亂丁本には責任を負います (曉印刷・佐山製本)

屈

原

(五
幕)

人物

屈原 (三閭大夫⁽¹⁾) 三十歳

宋玉 (屈原の弟子) 二十歳前後

嬋娟 (屈原の侍女) 十六歳

靳尚 (上官大夫。楚の佞臣) 三十歳あまり

子蘭 (楚の懷王の庶出の子) 十六、七歳

南后鄭袖 (懷王の寵姫。子蘭の母) 三十四、五歳

楚懷王 五十歳

張儀 (秦の丞相。連衡家) 四十歳あまり

子椒 (楚の令尹⁽²⁾。老いぼれ) 六十歳前後

招魂 (魂よせ)をする老人 六十歳前後

阿汪 (屈原家の門番) 六十歳前後

阿黄 (屈原家の下婢) 五十歳あまり

釣をする人 (河伯に扮する舞踊家) 三十歳あまり

漁網を打つ老人 五十歳ばかり

檻を看守する衛士 二十歳前後

鄭詹尹 (占いを掌る太卜⁽³⁾。鄭袖の父) 六十歳あまり

通りがかりの老婆、一人

王宮の夜廻り、一人

ほかに、女官、群集、衛士、歌舞、奏樂をする人たち

時代——戦國時代、楚の懷王の十六年(西紀前三一三年)

場所——楚國の都の郢(今の湖北省荊州)

第一幕

舞臺は晩春の夜明けの橘園（屈原家の後園）。なお幾つかの橘の實が枝々に残つてゐる。園は垣根にかこまれ、外園門（裏門）がやや右手よりにある。園の外は一面の田圃。左手には別に内園門があつて、内室（屈原の住居）に通じてゐる。園内の右側には涼亭（あずまや）があり園から階段であがるようになってゐる。亭内は卓子や石の椅子がおいてある。亭の階段は左を向いており、その各段に蘭草の鉢がならべてある。階段の下には竹箒木（はうき）が立てかけてある。園内には橘樹のほかに適當に竹木をあしらう。

嬋娟（十六歳）琴を抱いて左手の内園門から登場、涼亭にのぼり、卓子に琴をおき、よく整頓してから、もとの道を退場。

屈原（三十歳前後あごひげ無し）白色のふだん着をきて、巾幘（ちんさく）をかぶり、左手の内園門から登場。左手に帛書（絹布に書いたもの、當時はまだ紙は發明されてゐない）一卷を持ち、橘林の中を逍遙する。ときどき橘の枝を顔に近づけて香をかく。そして無意識裡に、實の一つを摘んで、右手の掌上でもてあそぶ。靜かに涼亭の階段をのぼり、最上段に腰をおろす。實の香をかいだり、あたりを眺めたりする。しばらく

くして實を階段の上におき、帛書をひらく。これは古い書體の篆字で書いた「橘頌」⁽³⁾で、字は朱墨を以て書かれている。おもむろに聲をあげて朗誦する。帛書をひらいた
り、巻いたりしながら――

あめつちにいのちを享けて
よき國によき樹たちばな
からたちの運命⁽⁴⁾を拒み
みんなみの空にかがよう

根はふかく心はかたく
徒^うしがたきみさをの譽^ほれ
葉はみどり花は白妙^{くた}
ゆたかにも榮ゆる樹々^{ゆづ}よ

枝えだに棘^{とげ}はありとも
つぶらなる果^みは輝くよ
青き果と黄金^{こがね}なす果と

あやなして稔りの園生

果の肉は白くかがやき

けがれなき道をぞ示す

偽りを知らぬ聖の

すがたして立つ樹讃えん

ここまで朗誦してから、帛書を膝の上におき、また橘の實をとつて掌中にもてあそび眼をとりて香をかぐ。それから眼をひらき、なかば無意識裡に橘の實を二つに割る。

しかし食べようとはせず、ただもてあそぶのみである。

このとき宋玉（二十歳前後）小さな黄色い犬を抱いて外園門から登場。短い上衣をきている。屈原を見てその前へ走つてゆく。

（階下に立つて）先生、おはようございます。

おお、ちやうど君を探していたところだ。どこへ行つていた？

お庭のお掃除をしてから、阿金（小犬の名）を抱いて外を一まわり走つてまいりました。

それはよかつた、君たち青年が朝早く起きて身體を鍛えるのは大變よいことだ。（靜かに

屈 宋 屈 宋
原 玉 原 玉

半分ずつの橘の實を合せて一つにすると、片手にその實を握り、片手に帛書をとつて起ちあがる。私は君のために詩を一つ書いた。まあ涼亭へあがつて坐ろうじやないか。（亭に入り、卓子の前に腰をおろし、橘の實を卓子の上に置く。宋玉あとに従つてあがり左側に侍立する）阿金をはなして、この新しい詩を読んでごらん。（帛書を宋玉に渡す。宋玉大を放す。屈原は琴をつまびきする）

宋

玉 （帛書の前半をひらき一回黙讀してから顔をあげ）先生、これは橘をほめたものでござい

ますか。

屈

原 そうだ、前半はそうだが、後半になるとそればかりではない。まああとを讀んでごらん。

宋

玉 （後半をひらいて朗讀しはじめる）

ああ汝いとけなきより

常の樹にたちまされるよ

ゆきずりの人手のまにま

徒さるるうきくさならず

獨り立つ篤き心の

いかで名を世には求めむ

おのが道おのれ踏みゆく
とられず流れず墮ちず

身はかたく心つつしみ
浮きたちて轉ぶことなし
徳を乗りわたくしを無みし
あめつちに恥ずるなき身よ

よろずの樹霜に枯るる日
ときわなるわが友たちばな
艶なれど淫らにあらず
梗なれど理のこまかき

たちばなは歸わかきも
わがための師とも仰がむ
伯夷(5)のごと秀でし操
とことわに鑑となさむ

(宋玉は朗誦し終つて、少しあわてるが、ひどく嬉しくもなつて) 先生、ほんとにこれは私のために書いて下さつたのでございますか。

屈原 そうだ、君のために書いたのだ。(以下對話中にたえず琴をつまびきする)

宋玉 それだけの値打ちが私にございますでしょうか。

屈原 それだけの値打ちを君が持つようになって欲しいと、私は願つてゐる。(右手で橘の樹を指さし) あの橘の樹を見たまえ。何という教訓に満ちてゐることだろう。いばるところもなく、おびえるところもなく、怠るところもなければ、ごまかすところもない。(間) そうだ、彼らは太陽をこそ喜ぶが、霜や雪も恐れはしないのだ。彼らのあのみどり葉はまるで翡翠ひすいのようだ。太陽の光が強ければ強いほど彼らは喜ぶが、霜や雪がどれほどはげしかろうと、彼らは少しも愁い顔は見せないのだ。時節がくれば花をひらく。しかもその花は何というよい香だろう、何という白さだろう。時節がくれば果を結ぶ。しかもその果は何というつぶらかなたち、何という色彩の變化だろう。青から黄に、黄から紅くれないに。そして果の内部は——ごらん、こんなにきちんと筋目があり、こんなに清く、こんなにすがすがしい。(橘の實をひらいてその内部を見せる) 彼らは花をひらき果を結ぶ、そして誰の口にも喜んで入つてゆく、その味がまた何という美味さである。食たべる人があつても悲鳴をあげないし、たべる人がなくつても怨みには思わない。全くどこまでも公平無私だ。しかし、橘は何でも人の思う通りになつて氣骨がない、なんて考えたら、それは大きなあやまりだ。まるでちがう。彼らの身體からだをまず見てごらん、からだには一面に棘とげがあ

るだろう。(また樹を指さす) 彼らは人が勝手に犯すことを許さない。彼らは、この南の國(6)に生れ、この南の國を愛している。他の土地へ移すのは容易なことではない。「たちばな、淮水わいすいを越えて北すれば、からたちとなる」という言葉を聞いたことがあるだろう。橘の樹は淮河の北へ行くと、たとえ生きてゆけたところで、どんなよい果も結べなくなるのだ。何という犯しがたい獨立の精神だろう。どうだ、全くよいお手本ではないか。

宋

五 いかにも。先生のお言葉を承わりまして、深い教訓を受けました。先生のお考えはつまり、樹木でさえこのような能力があるのだから、われわれ人間にそのような能力がないはずはない、ということでございます。(ちよつと考えて) 人間にだつてあると存じます。

屈 原

そうだ、君は私の言葉をわかつてくれた。君は聰明な少年だ。齡が若くても學問が好きで、物ごとに熱心だ。他の怠け者たちに誘惑されても、一緒に墮落するようなことはあるまい。私はほんとに嬉しく思っている。(問) それで私は君がこの橘の樹と同じように獨立不羈、凜烈れんれつ犯しがたい人物となるように望んでいる。無益のむさぼりをせず、心を虚ひなしうするがよい。流俗に同ぜず、志を堅持するがよい。おのれの進むべき道を定め、しかも明朗闊達、公平無私の精神を保つてゆくがよい。そうすれば泥沼に陥ることもなく、天地の間に恥ずるなき大丈夫たふさうと成り得るだろう。(問) 君がそのように成つてくれるならば、私は未永く君と年齢を越えた友情を結びたい。君がそのように成つてくれるならば、齡は若かろうとも、人々の師長たることができる。(問) しかし、餘りもつたいぶつてはいけない。剛直でありながらも、情理に通じることが大切

だ。ただ大義の關頭に立つたならば、斷じて妥協してはならない。斷じて屈服してはならない。あのいにしえの賢人、首陽山に餓死した伯夷のごとき人物を學んで、たとえ餓死しようとも節操を失つてはならない。私の言つたことがわかるだらうね。

宋

玉 はい、よくわかります。私は一生懸命に先生から學ぼうとしております。先生の御學問や御文章からも、先生の御人格や御生活からも學ぼうとしております。しかし先生の御風格はあまりに高すぎて、とても及びつきそうもございません。

屈

原 君は私を餘り高いものと考えてはいけません。また君自身を餘り低いものと見てもいい。いいかい。この點は大切だ。私自身きわめて平凡な人間だ。しかし、どんな人間だつてもとはみんな平凡だつたと思う。平凡からぬけ出たいならば、自分で努力する必要があるのだ。

(間) いちばんよいのは、自分たちのお手本を高いところにもとめることだ。歴史上の立派な人物をお手本にして一生懸命にそれに追いつこうとし、さらに追い抜こうとすることだ。このように努力をつづけるならば、必ず成功する。北方に顔淵という學者があつた。あの有名な孔夫子のお弟子だが、私は近頃になつて、顔淵の話したという言葉を聞いて非常に感心した。彼はこう言っている。「舜は何ものぞ、我は何ものぞ、爲すあるものはまたかくのごとし——これは非常によい教えた。私たちは誰でも舜帝が立派な人物であることを知つてゐる。しかし彼は一體何ものだらう。人間ではないか。私たち自身は何だらう。やつぱり同じ人間ではないか。彼があんなに立派な人物になり得たとするならば、私たちになり得ない道理があるらうか。なり得るのだ、な

り得るのだ。萬事人間の努力にあるのだ。雨水でさえ石に穴をあけ得るではないか。細い縄でさえ、木をのこぎることができるではないか。結局は人間のたえざる努力が肝要なのだ。

輝絹水瓶をかかえて登場、涼亭の下で水を尊〔水や酒を入れる器〕に注ぎ、それを持つて亭にのぼり卓子の前まで来て風原に捧げる。風原が呑み終るのを待つて、また尊を持ち、水瓶をかかえて退場する。

宋

玉

先生のお話、私かたく肝に銘じておきます。ただ私、ときどき感じるのでございますが、古人を學ぼうとしても、どこから始めてよいかわからずに苦しむことがあります。古人はすでに私たちから遠く隔つております。その聲、その顔はもう私たちのところへもどつては参りません。従つて古人を學ぶとすればどこから學び始めるべきでしょうか。私はいつも先生のお傍におります。先生のお聲、先生のお顔に毎日接することができます。それで私は一生懸命に先生をまねようまねようと努めておりますが、なかなかできません。

屈

原

（微笑んで）私の聲や顔をまねてどうするのだ。他人の聲や顔をまねるなんて猿のすることではないか。（起ちあがつて亭内にあるきまわりつつ）古人を學ぶのは、古人の精神、あのたゆまず努力する精神を學ぶことだ。いつも自己に鞭打つて一個の人間として完成してゆくことだ。（間）私たちはみなもともと平凡な人間なのだ。おまけに色々良からぬものを身につけている。たとえば、私たちは誰でも競争心がある。しかし、その一面だけ根性がある。そこに墮落の

たねが播かれるのだ。競争心というものはそれ自體悪いものではない。實際のところ、それは學問をする動機ともなるのだ。つまり、君が他の者より立ちまざりたいならば、あるいは最も勝れている者よりもさらに立ちまざりたいと考えるならば、一生懸命に努力して、實際に立ちまざるように成ればよい。君の本領が眞に他の人よりたちまざるようになってはじめて、君は他の人の上に出られるわけだ。そこには何らの問題もない。

宋

玉 いかにも、何の問題もございません。

屈

原 ところが實はそこから問題がはじまるのだ。人の上に出ることは愉快だ。しかし努力することは苦しい。そこでうまいことをしようと思つて、人より立ちまざつていない辯に、立ちまざつてゐるかのごとく虚勢を張るものがでてくる。それどころか、さらに進んで、おのれより立ちまざつてゐるものを陥れる。こうなつたら、それは虚偽だ、罪惡だ、墮落だ。(聲が一段と高くなるが、また低くして) この人間の怠け根性こそが、人間が身につけている墮落のたねなのだ。私たちは、まず、一生懸命にこの根性を除き去らねばならない。毎日、毎日、毎時、毎時、除き去らねばならない。何らの容赦なく除き去らねばならない。そのようにしてこそ君の學問は自然と進み、君の能力は自然と大きくなり、君の肉體まで自然と健康になるのだ。君はどこから着手してよいかわからぬとさつき言つたが、その實、君自身のことから着手すればよいのだ。(間) ただ私たちは、また他の人からも學ばねばならない。自分以外のあらゆるものから學ばねばならない。私たちは生れつき何一つ持つていない、全くの裸一貫だ。肉體ばかりでなく精神もまた裸な

屈 原

玉

はい、よく憶えております。

だから多くの人が、私の詩は俗つぽすぎるとか、放埒^{ちやう}すぎるとか、雅頌⁽⁸⁾の正調を失つてい

以前にも一度ならず話したから憶えているだらうね。

屈 原

玉

(あわてて) 先生、そんなことを仰言られては、私どうしてよいか……

のだ。しかし、その裸にただ一つだけ良いものをつけて来た。それは——「學び得る」という力だ。私たちは學び得る。學びさえすれば身心ともに充實してくる。學ぶべきものは至るところにある。たとえばさつき話したあの橋の樹だつて(林を指さしながら)私たちのための良い先生ではないか。また、たとえば、私の前に立つている君、私はいつも君を私の先生だと考えて……

いや、私は何も君に媚びようとするのではない。およそ君たち青年はすべて私の先生なのだ。人間は若いときは、競争心は強いが、怠け根性はそれほど強くはない。だから青年はすべて活潑で行動力に満ちており、私心などはあんまり無い。その點をこそ私は學びたいのだ。(また腰をおろして) まあ詩について話そう。私くらの先輩になると、どうしても詩が古くさくな

る。文章の構造や言葉づかいなどは立派そうに見えるが、着想の新鮮さや、純粹さや、素朴さの觀點に立てば、若い時にくらべて色あせたものになつてしまつてゐる。このことがいつも私を苦しめるのだ。こういう面では齡をとればとるほどだめになるようだ。(間) だから私は努めて

君たち青年から學びとろうとする。またあの純眞、素朴な民衆から學びとろうとする。そういう

ようにして、青年時代の新鮮さ、純粹さ、素朴さを努めて保持しようとしているのだ。この話は

るとか言つて非難する。しかし私はちつとも意に介しない。私は努めて民衆や子供から學ぼうとしている。だから俗つぽくなるわけだ。私はまた努めて雅頌の音調の因襲を破ろうとしている。だから放埒になるわけだ。あの雅頌の音調、あの古くさい四字一句の調子は民衆や子供の耳にはチンプンカンプンだ。あんなものこそ本来の人間性を失つたものと言つてよい。しかし話を前にもどそう。私は君たちよりも少し早く世に出たから、若いときに古典の訓誥教育を受けた。それで私の作品は今でも古くさい格調から脱けきれない。この「橋頌」を例にとつても——もう一度ひらいてごらん。（また起ちあがつてあるきまわる）

宋 玉 （帛書をひらいたり巻いたりしながら）つまり、ここにも四字一句の古くさが残つていと仰言るのですか。

屈 原 そうだ。私はできるだけ民謡風に「……よ」という調子をとりにいれてはみたが、まだやつぱり古くさい。これは奴隸の額にやきつけられた烙印みたいなものだ。奴隸の身分から解放されても烙印は一生消すことはできないのだ。君たちの世代になれば違ふ。君たちはもともと烙印など受けていない。だから君たちの詩は徹頭徹尾獨創的なのだ。その點は實に羨ましい。

宋 玉 そういう御態度にこそ先生の努めてたゆまぬ御精神があるのでしょう。今日はほんとに得がたい御教訓にあずかることができました。先生、この「橋頌」は私が頂戴してよろしいのでございませうか。

屈 原 もちろん君にあげる。君のために書いたのだから。

宋

玉 （拱手して）感激に堪えません。これから毎朝早く起きて必ずこの詩を朗誦することいたします。

屈

原 そんなにこだわる必要はない。詩のためだけに詩を大事にするなんて良くない。大切なのは古人の精神を學び、伯夷のような人物となることだ。

宋

玉 御教示ありがとうございます。しかし私は先生をこそお手本にしたいと存じております。伯夷のような人はどうも古くさく感じられます。殷の紂王は殘忍な暴君だったのですから、周の武王がこれを征伐したのは當然でしょう。暴君が殺されたからつて、どうして伯夷のごとく餓死する必要があるのでしょう。そこが私にはわかりかねます。

屈

原 正しい史實から言えば、そこに問題があるのだ。まあ園の中をあるきながら詳しく説明しよう。（亭から降りる、宋玉あとに従う）正しい史實から言えば、殷の紂王は決して悪い人ではなかった。とりわけわが楚國は彼に感謝すべき筋合いなのだ。わが楚國はもとと殷朝の同盟國であつた。殷の紂王とその父の帝乙の二代にわたつて、殷は大變な努力を傾けてこの長江流域の野蠻人を征服した。その隙に乘じて西方から周人が與りついに殷朝を滅ぼしてしまつたのだ。私たちの祖先は、宋人や徐人とともにそのとき壓迫を受け北方からこの南の地へ移動して來た。北方に楚丘と呼ぶところがあるのを知っているだろう。あそこが私たちの祖先のいた土地なのだ。もし殷の紂王が東南の野蠻人を征服していてくれなかつたら、私たちはこの地方に新しい天地を見出すことができず、周人の奴隸となつてしまつたかも知れない。周朝の人は殷朝を滅ぼした。